

国立国語研究所学術情報リポジトリ

明治初期のかなづかいの様相

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 秀英出版 公開日: 2019-02-15 キーワード: 作成者: 進藤, 咲子, SINDÔ, Sakiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001738

明治初期のかなづかいの様相

進 藤 咲 子

I 明治以後の歴史的かなづかい

明治5年以降、学校教育において契沖以来の歴史的かなづかい（一名復古かなづかい）が採用されるようになった事情について、日下部重太郎氏はつぎのように述べておられる。^{注1}

明治政府が新に国民教育を創めた時に、当局者は国語本位で教育を施す方針を立て、小学校にも国文法が課せられたのである。その国語といふのは文語であり、仮名遣は古典的のものを用ひた。これは時に取って当然の事であった。なぜかといふに、当時はまだ現代語が興らず、国語学は幼稚であり、従って標準語・標準音の研究調査の出来てゐない時であったから、政府は江戸時代の国学諸先哲が研究整理して置いた古典的仮名遣で文語を以て国語教育統一の標準としたのは、時に取って適当であり、己むを得ない事だったからである。

また、古田東朔氏は、歴史的かなづかい採用について、「明治初めの大学に国学者が多数関係していたことや、さらに学制当時の文部省になっても、榊原芳野・木村正辞・物集高見^{もずめ}といった人たちが在職していたことにも関係していると考えられます。」のように述べておられる。^{注2}

このような事情で採用された歴史的かなづかいは、現代かなづかいの制定を見るまで（昭22）たびたび国字国語問題の渦中に投げられながらも、長く教科書、法律文、公文書をはじめ、新聞、雑誌、一般刊行物（特殊なものを除き）のかなづかいの規範となっていた。

初期の学校入門期においては、子供たちは綴字科で「イー 糸 犬 錨」「井^ゐ 冢^{ゐのこ} 蝶^{ゐのり} 鰻」のように単語図のかなづかいは漢字によって覚えたのだ^{注3}。このように、規範となるべきかなづかいは学校教育において定まったけれども、当時の一般刊行物は、必ずしも歴史的かなづかいに準拠していたとは見られない。このことは、すでに先学の指摘するところである。^{注4}

では、どのような様相を呈していたのだろうか。当時の新聞や一般刊行物の中の二三について調査を試みた。小稿はその報告である。

注1 日下部重太郎氏 現代國語思潮 昭8刊 17ペ

注2 古田東朔氏 教科書から見た明治初期の言語・文字の教育 文部省国語シリーズ 昭32刊 24ペ ならびに、日本教科書大系国語(一)所収「小學入門」参照

注3 注2に同じ 25ペ

注4 日本文学大辞典 假名遣 橋本進吉氏述

II 調査の対象になった資料

この調査は、国語かなづかいの範囲にとどめた。調査の対象は、おもにふりがなである。

資料はつぎのものである。

郵便報知新聞 明治10年11月から、明治11年10月までの一年間の $\frac{1}{12}$ のサンプル調査 (異語数 22272, 延べ語数87315・これらの語数は固有名詞を除いたものである。以下同様) によって得られたふりがなつきの語すべて。総数 2887 語 (字音を除く)

また比較資料としてつぎのものを用いた。

- 1 小新聞(読売新聞・東京絵入新聞) 明治11年7月から明治12年6月までの一年間の $\frac{1}{33}$ ずつのサンプル調査。二新聞合わせて小新聞として一括する(異語数8394)。訓よみふりがな 3406 語
- 2 安愚楽鍋 明治4年刊 訓よみふりがな 826 語 (全数調査による異語数4131, 延べ語数9370)
- 3 交易問答 明治2年刊 訓よみふりがな 393 語 (全数調査による異語数934, 延べ語数4500)

比較資料三つは、郵便報知新聞の結果にかたよりがあるか、ないかを見るために用いたものである。これら比較資料では、宛字や熟字訓など特別の読みを示すものを除いた訓よみふりがなのみを調査の対象とした。

郵便報知新聞^{注1}は論説を主にし、雑報(社会面)や外国事情なども報道したインテリ向きの新聞である。(このような新聞を小新聞に対し大新聞という。)この新聞には、おもに雑報欄にいわゆるパラビがほどこされている。他の欄にもあるが量は少ない。郵便報知新聞には、^{注2}大まかにいって二つの異った文体が用いられている。すなわち、論説的な報道には、漢文読み下し体のかたい文章が書かれ、漢字片かなまじり文で表記された。今一つは雑報で主として戯作風の俗文体

の文章が書かれ、漢字平がなまじり文で表記された。雑報は一部の政治や経済のかたい記事を除いては、戯作者の筆になったものと推測され、戯作特有の俗文体で書かれている。

比較資料に用いた小新聞の読売新聞や東京絵入新聞は、啓蒙を意図し、婦女子むきに平易な文章（口語体が主）で、おもに巷間のニュースを報道した新聞で、総ふりがながついていた。安愚楽鍋は当時の人気戯作者仮名垣魯文が、こんとんとした世情を各種階層の人物を登場させて描写した文学作品で、ふりがなが多い。交易問答は、のちの帝国大学総長加藤弘之が啓蒙の意図をもって、外国との交易の必要性を問答体（ゴザル体）で書いたもので、ふりがなが多い。

今回のかなづかい調査の資料は、筆者が所属する近代語研究室の用語調査の結果から得られたものであり、昭和37～38年度に行なった表記（おもにふりがな）調査の一部である。

注 1 国立国語研究所報告 明治初期の新聞の用語 調査のあらまし参照 昭34刊

注 2 国立国語研究所年報15 明治時代語の調査研究 ルビ（ふりがな）の調査参照 昭40刊

注 3 国立国語研究所年報12 明治時代語の調査研究 明治11、12年の小新聞の用語 調査参照 昭36刊

注 4 国立国語研究所報告 明治初期の新聞の用語 前出
国立国語研究所年報12 明治時代語の調査研究 前出

III 調査結果

かなづかいの誤りは、イ音（い・ゐ・ひ）、エ音（え・ゑ・へ）、オ音（お・を・ほ・う・ふ）、ワ音（わ・は）、ジ音（じ・ぢ）、ズ音（ず・づ）、および他の若干の音（例えば、コオ・キョオ・トオなど）を持つ語を表記する際にあらわれる。この場合、誤りとは、歴史的かなづかいを正とした時、これと違うかなづかいをさす。ある誤りは語頭にあらわれやすい傾向があり、ある誤りは語中・語尾にしかあらわれない。また、語尾変化、音便形の誤りといったものもある。

語尾変化や音便形など活用に関する誤りは、われわれの時代ほどの活用意識はなかったであろうけれども、多少の知識のあるものならば類推によって、ふせげるはずのものである。活用に関するかなづかいは、とくに送りがなの関連の上で見る必要がある。しかも、今回は、送りがなの問題については、ほとんど触れなかった。（ただし、送りがなについては多少調査したものがある。^注）活用に

関係のない語になると、黒沢翁満の「言霊のしるべ」のように、暗記法によっておぼえるということがよい方法ということになるのだらう。いずれにしても、この二つは分けて考察した方が都合がよいと思う。

注 国立国語研究所報告15 明治期の新聞の用語 表記を分析する 256ページ参照
さて、つぎに掲げるかなづかいの表では、

正しいかなづかいだけの語……A

誤ったかなづかいの語（正誤ゆれのある語はここに入れる）……B以下とする。

AおよびB以下とも、これに所属する語を便宜つぎのような目安に従って整理する。

語頭 （複合語の後要素の語頭も含む）

語中・語尾

用言（用言の活用語尾、及び、他の品詞に転化したもの。ならびに、それらが語の構成要素として含まれている語。音便形）

なお、これらに分ける時、あまり語源ということについては考慮しなかった。以下の用例の字体は現行のものに従った。

1 イ音のかなづかい

(1) 「い」と書くべき語

A 正しく「い」と書かれた語 89語 異語数・以下同様

語 頭 ^{いと}最^{*}(7) ^{いとま}暇(8) ^{いのち}命(4) ^{いりこみ}輸入など 74語 *使用回数・

以下同様

語中・語尾 ^{たいこ}幫間、^{ついで}序に、^{ひいで}秀るなど 6語

用 言 ^い射る、^{つい}就ては、^{ついで}衝立、^{ひい}延てなど 9語

B 「い」を「ひ」に誤った語 1語

語中・語尾 ^{かの}窺まみる 1語

(2) 「ひ」と書くべき語

A 正しく「ひ」と書かれた語 16語

語中・語尾 ^{なましひ}薩摩魂、^{たぐひ}類、^{よわひ}齡 3語

用 言（ハ行四段・ハ行上二段） ^{いさかひ}鬭争、^{かけあひ}照合、^{こひ}恋し、^{さらひ}温習、^{ゆひ}結納金
など13語

B 「ひ」を「い」に誤った語 53語

語中・語尾 19語

語	誤 実数	正 実数	語	誤	正	語	誤	正
あいだ 間	3	0	しいたけばこ 椎茸筍	1	0	なりわい 商業 ^{注2}	2	1
あいな 相対示談 ^{注1}	1	0	たいら 平か	1	0	なまじい 愁	1	0
いりあい 入相	1	0	たがい 互に	1	0	なとがい 願 ^{注3}	1	0
こい 鯉	1	0	ついで 遂	1	0	は い 這入る	2	0
こよい 今宵	1	0	ついで 遂に	10	0	はいつち 灰土	1	0
さかい 境	1	0	ついで 費へ	1	0			
しいたけ 椎茸	1	0	ついで 費す	2	0			

注1 正しくは「アヒタイ」 注2 「は一わ」の部重出

注3 「お一を」の部重出

用 言（ハ行四段・ハ行上二段） 35語

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
あいかた 合方	1	0	おちつきはらい 従 容	1	0	せ おい 背負居る	1	0
あいづ 合図	1	0	おりあい 折合 ^{注1}	1	0	だしあい 齟金	2	1
あたい 価	2	1	かい 買求む	1	0	にら み あい 白眼合	1	0
いい 言伝ふ	1	0	かかりあい 関係	1	0	ゆい 縫仕事	1	0
いい 言解く	1	0	かみゆい 髪結風情	1	0	ねらいうち 狙撃	1	0
いい 言遣す	1	0	きちがい 瘋癲	1	0	はらい 払下	1	0
いい 言張る	1	0	くいづめ 喰詰士族	1	0	ひ をい ^{注2} 日覆	1	0
いい 言触る	1	0	こい 恋	2	2	ふるまい 振舞	3	1
いい 言紛らす	1	0	さまよい 彷徨	1	0	まじない 呪	1	0
うらすまい 裏住居	1	0	さむらい 侍	1	0	やしない 滋養分	1	0
うりかい 売買	1	0	しい 強て	2	0	わらいぐさ 笑草	1	0
おい 追焚	1	0	すまい 住居	3	0			

注1 「を一お」の部重出 注2 「お一を」の部重出

(3) 「ゐ」と書くべき語

A 正しく「ゐ」と書かれた語 2語

語	頭	胃	1語
語中・語尾	しばる	劇場	1語

B 「ゐ」を「い」に誤った語 15語

語中・語尾 6語

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
^{いなか} の 僮父	1	0	^{はかまい} 墓参り	1	0	^{あゐ} 参る	2	0
^{いなか} 片田舎	1	0	^{あゐ} 参らす	1	0	^{もとい} 基	1	0

用言(ヤ行上一「居る」の複合語) 9語

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
^{あわ} 居合す ^{注1}	1	0	居流れ	1	0	^{しりい} 尻居	1	0
^い 居たたまる	1	0	^い 居睡り	1	0	^{ながい} 詠め居る	1	0
^い 居直す ^{注2}	1	0	^{うちふしい} 打俯居る	1	0	^{なみい} 並居る	1	0

注1 「は一わ」の部重出 注2 「ほ一お」の部重出

以上「イ音」のかなづかいを通してみると、「い」を用いるべきかなづかいでは、語頭が「い」で始まる語は「ゐ」と書かれた例がない。語頭に「ゐ」を用いるべき語がきわめて少ないことにもよろう。語中・語尾の「い」を「ひ」に誤ったものもきわめて少ない(1例)。「ひ」を用いるべきかなづかいは、語中・語尾、および用言の活用語尾にあらわれるのだが、正しく「ひ」と書かれたものよりは、「い」に書き誤られたものが多い。ついでに述べるなら、送りがなにおける活用語尾は、「ひ」を「い」に誤るものは、ほとんどない。むしろ、口語形容詞の終止形が「高ひ」「能ひ」のように誤られることがあった。口語形容詞のこのような現象にはどのような語表記意識が働くのか把握し得ないでいるが、動詞の方は、書き手の側に、本文に位置する送りがなに対しては、規範意識が働くということなのかも知れない。裏を返せば、ふりがなは文字が読めればよいといった意識が強く働くのではなからうかということになる。「ゐ」と書くべき語は先にも述べた通りあまり多くない。従って郵便報知新聞でも用例は多くない。「用言」における9例は、すべてワ行上一段の「^ゐ居る」の複合語が「い」に誤られている。

「イ音」のかなづかい全体を通じて言えることは、「ゐ」ないし「ひ」と書くべきところに「い」を書くものの多かったことが、その特徴であろう。同じ語の中での正誤のゆれも少なく、誤りの形の方に表記が一定しているように見られる。その誤りの傾向は、現代かなづかいの語の表記のきまりにきわめて近いと言

えよう。

2 エ音のかなづかい

(1) 「え」と書くべき語

A 正しく「え」と書かれた語 3語
 用 言(ヤ行下二) 煮壺^{にえつば}, 燃出る^{もえ}, 萌黄^{もえぎ} 3語

B 「え」を「ゑ」に誤った語 13語

語 頭 6語

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
奇縁 ^{おにし}	1	0	撰み挙 ^{あら あぐ}	1	0	襟元 ^{ありもと}	1	0
選ふ ^{あら}	1	2	領 ^{あり}	1	0	半襟 ^{あり}	1	0

語中・語尾 3語

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
糞溺 ^こ	2	0	人糞 ^{しもご}	1	0	笛 ^{ふえ}	1	0

用 言(ヤ行下二・ア行下二) 4語

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
得 ^あ	2	0	探り得 ^あ	1	0	吼 ^ほ	1	0
得物 ^あ	1	0						

C 「え」を「へ」に誤った語

活 用(ヤ行下二) 8語

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
超越 ^{すこへ}	2	0	絶ず ^{たへ}	1	0	燃揚り ^{もへあが}	1	0
絶 ^{たへ}	1	1	生 ^{はへ}	1	0	悶る ^{もだへ}	1	0
絶て ^{たへ}	2	0	増殖 ^{ふへだし}	1	0			

(2) 「ゑ」と書くべき語

A 正しく「ゑ」と書かれた語 4語
 語 頭 笑顔, 画く, 図室^{えずべや}, 野画^{けいびき}

B 「ゑ」を「え」に誤った語 2語

128 明治初期のかなづかいの様相

語 頭 ^{えひたを}酔倒れ^注 (正なし) 1 語

注 「ふ一を」の部重出

活 用 ^{うえじに}餓死 (正なし) 1 語

C 「ゑ」を「へ」に誤った語 15語

語中・語尾 9 語

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
^{こへ} 声	1	1	^{つへ} 杖	1	0	^{やまどづへ} 倭杖	1	0
^{こずへ} 梢	1	0	^{ばすへ} 場末	1	0	^{ゆへ} 故	1	1
^{すへ} 末	2	1	^{はなしごへ} 咄声	1	0	^{ゆすへ} 行く末	3	0

用 言 6 語

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
^{うへ} 植足す	1	0	^{うちすへ} 打据	1	0	^{すへ} 据付く	1	0
^{うへ} 植付く	5	0	^{うへげん} 据膳	1	0	^{すへ} 据置く	1	0

(3) 「へ」と書くべき語

A 正しく「へ」と書かれた語 25語

語中・語尾 ^{あへ}喘ぐ, ^{うらがへ}裏返す, ^{かへ}帰る, ^{まへ}分け前など 14語

用 言 (ハ行下二) ^{うろたへ}狼狽, ^{くらがへ}倉替, ^{かまへ}結構, ^{たへ}堪難し, ^{とらへ}捕んなど 11語

B 「へ」を「え」に誤った語

用 言 ^{をしえ}教^注 1 (正なし) 1 語

注 「ふ一を」の部重出

C 「へ」を「ゑ」に誤った語 5 語

語中・語尾 3 語

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
^{かあつ} 翻て	1	0	^{ななゑ} 七重	1	0	^{ゆくゑ} 行衛	2	0

用 言 2 語

語	誤	正	語	誤	正
^{うろたゑ} 狼狽	1	0	^{たくわゑ} 貯 ^注	2	0

注 「は一わ」の部重出

「え」(多くは「に」に書かれる)と書くべきかなづかいは「ゑ」ないし「へ」に誤って書かれることが多かった。「え」を「ゑ」に誤って書かれる語は、用言の活用語尾ばかりでなく、それ以外の語頭や語尾にも見られた。「え」を「へ」に誤って書かれる語は、活用語尾のみにあらわれた。「ゑ」と書くべきかなづかいは、「え」よりも「へ」に書き誤られることが多かった。「へ」は語頭にはあらわれないから、語中・語尾(すべて語尾)か、ワ行下二段の活用語尾(植・据)にあらわれた。「へ」と正しく書かれた語は誤って書かれた語より多かった。活用からいえば、「え」「ゑ」ではヤ行とワ行、ア行とワ行の動詞、「え」「へ」ではヤ行とハ行、「ゑ」「へ」ではワ行とハ行に乱れが見られたことになる。「え」「ゑ」「へ」を通して、「え」は「ゑ」に誤られやすく、「え」「ゑ」とも語中・語尾ないし用言の活用語尾では「へ」に誤られる傾向が見られた。

3 オ音のかなづかい

(1) 「お」と書くべき語

A 正しく「お」と書かれた語 44語

語 頭 ^{おさとし}説論, ^お追ひつく, ^{おそ}恐れ, ^{おもむき}風致, ^{おやじ}老爺 (「ぢーじ」の部重出),
^{くば}配り置く, ^お忸ね起くなど 44語

B 「お」を「を」に誤った語 93語

語 頭	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
^{をく} 云送る	1	0	^{をさかし} 起臥	2	0	^{をししづ} 押沈む	1	0
^{うけを} 請負ふ	1	0	^{をく} 送る	10	4	^{をしたを} 押倒しざま ^{注1}	1	0
^を 打捨置く	1	0	^{をく} 後れ	2	0	^{をしとど} 押止む	1	0
^を 負ふ	4	2	^を 起こす	3	3	^を 押し拭ふ	2	0
^を 老ひ先き	1	0	^{をこた} 怠り	3	0	^{をし} 推量る	1	0
^を 逐ひ返す	1	0	^{をこた} 怠る	2	1	^{をしらい} 白粉	1	0
^を 逐ひ立つ	2	0	^{をこ} 起る	4	1	^を 推す	1	0
^を 生ひ茂る	1	0	^{をごり} 驕	1	0	^{をそぎはやぎ} 緩急	1	0
^{をひめ} 負債	1	0	^{をさ} 押ふ	6	1	^{をそ} 遅し	1	1
^を 追ひ行く	1	0	^{をさ} 押へ ^{とこ} 所	1	0	^{をそなへ} 御献備	1	0
^{をかん} 官	1	0	^{をしいだ} 押出す	1	0	^{をだや} 穩か	4	0
^を 起く	1	0	^{をぢゆうぢ} 院下様	1	0	^{をちい} 陥る	1	0
^{をきら} 起居	1	0	^{をしき} 押切る	1	0	^{をちふだ} 落票	1	0

追手	1	0	御身達	1	0	捨て置く	1	0
音	1	0	重し	1	2	背負ふ	3	0
弟注 ²	1	0	思ふ	2	1	父親	1	0
頤	1	0	思ひ掛けなし	1	0	積み送る	1	0
落す	1	1	思入れ	1	0	負傷	1	0
爺さん	1	0	重立つ	1	0	説き起す	1	0
音信れ	1	3	表	1	0	取り押ふ	1	1
劣る	1	0	萬年青	1	0	織機	1	0
衰ふ	1	0	趣き	4	4	腹帯	1	0
驚く	1	0	頭職	1	0	日覆	1	0
驚き怖る	1	0	親	2	1	吹起る	1	0
鬼	1	0	親里	1	0	両親	2	0
己	1	0	老ゆ	1	1	船卸し	1	0
己	1	0	降る	1	1	踏み壓ふ	1	0
帯ぶ	1	1	織り出す	1	0	任せ置く	1	0
夥し	2	4	掲げ置く	1	0	身重	1	0
覚ゆ	2	1	扱置き	1	0	設置	1	0
溺る	1	0	仕負ふす	1	0	呼び起す	1	0

注1 「ふーを」の部重出

注2 「うーを」の部重出

(2) 「を」と書くべき語

A 正しく「を」と書かれた語 25語

語 頭 芋あか, 岡焼をか, 吝惜をし, 男をとこ(2), 折りを(2), 棺桶くわん, 手踊てまどり, 雇やと 婢ひをんな
 など 22語

語中・語尾 ^{あな}青ざめ, ^{うを}魚売り, ^{かなさを}鉄棹 3語

B 「を」を「お」に誤った語 27語

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
あづまおとこ 東 男	1	0	おか 冒す	1	1	お 惜し	1	1
あやふ 姦ふ	3	0	おきなご 幼児	1	0	おきな 幼し	1	1
おか 可笑し	2	0	おまり 結末	1	0	お 伯父	1	0
おかしみ 可笑味	1	0	お 納む	1	5	お 叔父	2	0

おつと 夫	6	4	おり 折々	1	0	くく お 括り緒	1	0
おとし 一昨年	1	1	おりふし 折節	2	0	しばおりど 柴折戸	1	0
おどり 踊	1	1	おり 折よし	1	0	はな お 鼻緒	1	0
おどる 踊る	1	0	お 折れ	1	0	ゆびおり 屈指	1	0
おば 叔母	1	0	おわ 終る注1	2	5	おしえ 教注2	1	1

注1 「は一わ」の部重出 注 「へーえ」の部重出

C 「を」を「ほ」に誤った語 2語

語	誤	正	語	誤	正
ほぞは 細棹	1	0	みさほ 操	1	0

(3) 「ほ」と書くべき語

A 正しく「ほ」と書かれた語 12語

語中・語尾 いほり かほ しほ とほ には
菴, 顔形, 汐, 通り掛り, 匂ふなど 12語

B 「ほ」を「を」に誤った語 15語

語中・語尾

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
いとを 最惜し	1	1	なを 捏ね直す	1	0	ななざり 等閑	1	0
いなを 居直る注1	1	0	とな 遠し注2	1	0	なな 直す	2	0
うるを 沾す	1	0	とな 通る	1	0	なな 癒る	2	0
なを 思ひ直す	1	0	なを 取り直す	1	0	にな 臭ひ	1	0
かを 顔	1	4	なを 猶	1	0	よなな 粧う	2	0

注1 「ゐーい」の部重出 注2 遠し 1例あり

C 「ほ」を「う」に誤った語 5語

語中・語尾

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
いさどう 憤る	2	1	とう 遠し	1	0	ほう 煩	1	1
をうづつ 砲礮	1	0	とう 遠ざかる	1	0			

D 「ほ」を「ふ」に誤った語 3語

語中・語尾

132 明治初期のかなづかいの様相

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
とどこふ 滞り	1	0	とどこふ 滞る	1	0	すきとふる 透明	1	0

(4) 「おほ」と書くべき語^注

A 正しく「おほ」と書かれた語 0

B 「おほ」を「をを」に誤った語 4語

語	誤	正	語	誤	正
ををきやか 巨大	1	0	ををたぶさ 大髭	1	0
をを 覆ひ	1	0	ををむ 概ね	1	0

C 「おほ」を「おお」に誤った語 2語

語	誤	正	語	誤	正
おお 大きな	1	0	おおがく 一大巨額	1	0

注 「7 その他」で扱うべきであろうが、便宜、ここに入れた。

(5) 「ふ」と書くべき語

A 正しく「ふ」と書かれた語 0

B 「ふ」を「を」に誤った語 9語

語中・語尾

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
あを 仰く	1	0	えひたを 酔倒れ ^{注1}	1	0	たを 斃れ死す	1	0
うちたを 殴倒し	1	0	をしなを 押倒しさま ^{注2}	1	0	ふきたを 吹倒す	1	0
たを 打倒る	1	0	たを 倒る ^{注3}	12	2	ゆきたを 行倒る	1	0

注1 「多一え」の部重出 注2 「お一を」の部重出

注3 「ふ一お」の部重出

C 「ふ」を「う」に誤った語 1語

語中・語尾 昨日 2 (正なし)

(6) 「う」と書くべき語

A 正しく「う」と書かれた語 0

B 「う」を「を」と書かれた語 1語

語中・語尾 ^{おとを}弟注 1 (正なし)

注 「おーを」の部重出

オ音をあらわすかなには、「お、を、ほ、ふ、う」の5文字が用いられた。「ほ、ふ、う」は、語頭には用いられない。すべて語中・語尾であるが、歴史的かなづかいで、「ほ、ふ、う」を用いて表記する語は少ない。「ほ、ふ、う」のかなづかいが誤られる場合、「を」に誤られることが多い。オ音の長音の「おほ」と書かれるべき語は、「おお」よりは「をを」に誤られたものが、わずかが多い。ここには「おう」になる誤りは見られなかった(7 その他の項参照)。「お」「を」では、歴史的かなづかいでは「お」と書くべき(語頭)語はきわめて多く、「を」は80語足らずである。それ故、歴史的かなづかいがよく浸透していれば、「お」に誤る傾向が出てくるはずだと思うのだが、この調査では、歴史的かなづかいとは逆に「を」に誤る傾向が多い。この表では、正しく「を」に書かれた語34(誤り例の中の正誤ゆれのある語の正しいかなづかいのものを含む)、誤って書かれた「を」124に対し、正しく「お」に書かれた語63、誤って書かれた「お」29であって、「を」を用いたものがかなり多い。しかし「を」を用いた語はすべてで158、「お」を用いた語はすべてで92語であるから「を」を用いることが優勢ではあったけれども「を」と「お」のかなづかいがいちじるしくゆれていたというべきであろう。「を」が「お」に誤られる数は「お」が「を」に誤られるものより少ないが、「を」と書くべき語は絶対数が少ないことも考慮しなければならないだろう。しかし「を」に書き誤られやすい傾向があるということは、エ音をあらわすかなで「え」よりも「ゑ」に誤られやすい傾向を見たと同様、少し奇妙な感がある。「を」の多いのはあるいは助詞「を」に影響されたためであろうか。もしそうならば、「え」や「ゑ」が「へ」に誤られやすいのは、助詞「へ」に影響されている面もある、ということができよう。「お」「を」については、どちらをかなづかいの標準とすべきか、明治になって、かなづかいが問題になった時、なかなかきまらなかったようだ(「え」の場合は問題がなかったようだ)。明治17年発行の「かなのくわい」のゆきのぶ(表音的かなづかいを主張する)の人々の雑誌「かなのまなび」第6号の「ぶんのかきかた」の中に、オ音だけが「お」をとるべきか「を」をとるべきか定まらなかったと書かれている。^{註1}また、明治38年に、かなり表音的な国語の仮名遣改定案(文部省)が作られ、高等教育會議、国語調査委員会などに諮問されたが、その緒言に「本案ノ改案仮名遣実行ニ伴ヒ五十音図中阿行ノおハをニ改メ、和行ノゐハゑ

ニ改ム」としている。このようにしてなかなか定まらなかったようであるが、明治38年の国語調査委員会の答申の中に、「三爾遠波、『は、へ、を』ニ許容若クハ例外ヲ設ケタルコト^{注2}」という条項があり、今日のオ音のかなづかいの基礎が定まると見るべきであろう。

注1 日下部重太郎氏 現代國語思潮 170へ

注2 同左 322~328へ

4 ワ音のかなづかい

(1) 「わ」と書くべき語

A 正しく「わ」と書かれた語 11語

語中・語尾 ^{あわてる}倉室, ^{かわ}燥く, ^{ことわり}道理, ^{さわ}騒く(3), ^{すわ}坐るなど 11語

B 「わ」を「は」に誤った語 1語

語中・語尾 ^{あはただ}遽し 1(誤) 3(正) 1語

(2) 「は」と書くべき語

A 正しく「は」と書かれた語 8語

語中・語尾 ^{うはくちびる}上唇, ^{にぎは}賑ふ 2語

用言 ^{いつは}偽り, ^{つさは}突合せ, ^{に あは}似合すなど 6語

B 「は」を「わ」に誤った語 75語

語中・語尾 51語

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
^{あらわ} 現す	2	3	^{かたわ} 側ら	6	1	^{くわだ} 企て	2	0
^{あらわ} 顕る	1	5	^{まわ} 勝手回り	1	0	^{くわだ} 企つ	4	1
^{あわ} 粟	1	0	^{かわや} 厠	1	0	^{けわし} 険阻	2	0
^{あわれ} 哀	5	0	^{かわ} 革文庫	1	0	^{こわ} 怖し	2	0
^{あわれ} 憐む	2	2	^{さわ} 際	2	0	^{さいわ} 幸ひ(名)	1	0
^{いつわ} 詐り	1	1	^{さわ} 際立つ	1	0	^{さいわ} 幸ひ(副)	1	0
^{いわ} 祝ふ	1	1	^{さわ} 極む	1	0	^{ささわ} 障り	1	0
^{いわ} 祝ひ事	1	0	^{さわ} 極めて	1	0	^{しにぎわ} 死極	1	0
^{うちこわ} 打毀す	1	0	^{さわ} 極物師	1	0	^{ぢ まわ} 地回り	1	0
^{まわ} 打ち回る	1	0	^{くわ} 桑	1	0	^{まわ} 建回す	1	0
^{うわさ} 噂	7	1	^{くわ} 委し	8	0	^{まわ} 尋ね廻る	1	0
^{かわわり} 干連	1	0	^{くわ} 加へる	2	0	^{たわむ} 戯れ	4	1

て ぎわ 手際	2	0	にお 俄かに	6	1	みまわ 見回り役	1	0
なりわひ 商業	3	0	きわ ノタ打廻る	1	0	やわら 柔かし	1	0
なわめ 縄目	1	0	きわ 一ト際	1	0	やわ 和らぐ	1	0
にぎわ 賑ひ	1	2	きわ 振り廻す	1	0	よわひ 寿齡	1	0
にぎわ 賑ひ合ふ	1	0	みあらわ 見顯す	1	0	わらわ 妾	3	3

用 言 24語

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
あわ 合す	3	1	かわるゝ 交々	1	0	ならわし 相應	1	0
え あわ 居合す注1	1	0	しなわ 慕し	1	2	ふしあわせ 薄命	1	1
いわゆる 所謂	3	0	せ おわ 負擔す	1	0	ま あわ 聞に合せ	1	0
いわ 謂れ	1	1	ただよわ 漂す	1	0	みかわ 見替す	1	0
うつかわ 移り替る	1	0	つかわ 遣す	1	0	むくわ 酬(ん)	1	0
をわ 終る注2	6	1	とひあわ 照合す	1	0	め あわ 妻合す	1	3
をわ 負(しむ)	2	0	あわ 取り合す	1	0	よ 讀み了る	1	0
かわ 替り	2	0	ならわし 習慣	1	0	わづらわ 煩す	1	0

注1 「ゐーい」の部重出 注2 「をーお」の部重出

ワ音のかなづかいのゆれは語頭にはない(走^{わし}という慣用的表記が1例見られた)。「は」と書くべきかなづかいに、表音的な「わ」を用いることがきわめて多かった。用言の活用語尾では、ハ行下二段の未然形が「わ」になる傾向が見られた。活用語尾以外のものでは、正しく「は」と書かれたのは2語で、あとすべてのワ音のかなづかいは「わ」と書かれた。「わ」を語中・語尾に用いることはきわめて少ないのだから、「は」を書くべきところに、無反省に表音的な「わ」を用いたことになる。であるから、「わ」と正しく書かれた語は、正しいかなづかいという意識で書かれたものではなからうと思われる。むしろ、「は」に書き誤った「邊^{あはただ}し」は、正しい表記が3例あるのだから、全体の趨勢としては、反省した結果の誤りとも言えそうである。

5 ジ音のかなづかい

(1) 「じ」と書くべき語

A 正しく「じ」と書かれた語 17語

語中・語尾 あるじ 楼主(2) うじ 蛆、挫く、馴染む、短かしなど 17語

B 「じ」を「ぢ」に誤った語

語中・語尾 ^{つぢつま}辻褄 1 (正なし)

(2) 「ぢ」と書くべき語

A 正しく「ぢ」と書かれた語 6語

語 頭 ^{ぢぢ まぢか}爺々, 間近 2語語中・語尾 ^{かぢづか ほていをやぢ}楫柄, 布袋爺 2語用 言 ^{とぢ はぢ}鎖る, 恥らふ 2語

B 「ぢ」を「じ」に誤った語 11語

語中・語尾 9語

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
^{あじ} 味	1	0	^{くじら} 鯨魚	1	0	^{あじだな} 藤棚	1	0
^{おやじ} 老爺	1	0	^{しくじら} 死鯨	1	0	^{よみじ} 黄泉	1	0
^{かじ} 楫	1	0	^{すじたて} 糸立	1	0	^{わらじ} 草鞋	1	0

用 言 2語

語	誤	正	語	誤	正
^{ねじ} 捻伏す	1	0	^{はじ} 恥	2	2

6 ズ音のかなづかい

(1) 「ず」と書くべき語

A 正しく「ず」と書かれた語 5語

語中・語尾 ^{いしすゑ かず}礎, ^ず数, ^{わびずま}引き摺る, 寂住ひなど 5語

B 「ず」を「づ」に誤った語 12語

語 頭 ^{づるづる}荏苒 1 (正なし) 1語

語中・語尾 11語

語	誤	正	語	誤	正	語	誤	正
^{かきづ} 抓き痕	1	0	^{ねづみ} 銀鼠	2	0	^{ふかきづ} 深疵	1	0
^{きづ} 傷	4	0	^{きづ} 数創	1	0	^{たたづ} イむ	1	3
^{きづあと} 痕痕	1	0	^{きづ} 生疵	1	0	^{ふるきづ} 旧瘢	1	0
^{きづ} 傷付く	1	0	^{はづ} 筈	1	0			

(2) 「づ」と書くべき語

A 正しく「づ」と書かれた語 70語

語 頭 片^づ付く(四段), 片^づ付く(下二・3), 氣^づ稜, 帳^づ面, 当署^{づめ}詰, 基^{もとづ}
 く 6語
 語中・語尾 預^{あづか}る, 崩^{くづ}す, 授^{さづ}く, 手続^{つづ}き, 外^{はず}す, 貧^{さづ}し, 水物^{みづ}, 僅^{わず}など
 64語

B 「づ」を「ず」に誤った語 2語

語中・語尾

語	誤	正	語	誤	正
浮 ^{うき} 沈 ^{しずみ}	1	0	沈 ^{しず} む	1	2

「ジ」「ズ」音のかなづかいについて一括して述べる。「ジ」音では「じ」より「ぢ」と書くべきかなづかいの語が国語かなづかいでは多い。しかし、この調査では逆に「ぢ」が「じ」に書き誤られることが多い。ただし、同音の連呼や複合の結果、連濁現象を起こした場合は、「続く、間^つ近^ぢ、梶^づ柄」のように書かれ、誤りは見られなかった。「ズ」音の国語かなづかいでは、「ず」より「づ」に書くべきかなづかいが多い。この調査では、「づ」について言えば、正しく「づ」を用いたかなづかいが多い。この音に関しては、珍しく歴史的かなづかいに忠実と言えよう。このように「ジ」音ではザ行を、ヅ音ではダ行を書きやすいというのは、どういうことなのだろうか。「ジ」音の活用語尾では、「じ」「ぢ」にゆれが見られる。「ズ」音の活用語尾は「づ」が書かれ、誤りはなかった。活用を考えれば、「じ」に誤ってはならないのだが、このような活用意識が書き手の側にどの程度働いたものなのだろうか。

7 そ の 他

1) 「かう」を「かふ」「こを」「こう」に誤った語 3語

語	誤			正 かう
	かふ	こを	こう	
被 ^か むる	2	1	4	0
鰻 ^{こう} 鰻 ^{もり} 傘	1	0	1	0
壮 ^{わか} 年 ^{ふと}	1	0	0	0

138 明治初期のかなづかいの様相

- 2) 「がふ」を「がう」に誤った語 1語

^{うたがう}
疑 らくは 1 (正なし)

- 3) 「けふ」を「きやう」「きやふ」「きよう」に誤った語 1語

誤	誤			正 けふ
	きやう	きやふ	きよう	
^{きやう} 今日	1	1	1	0

- 4) 「たう」を「とう」「とふ」に誤った語 1語

語	誤		正 たう
	とう	とふ	
^{まつとう} 全 す	1	1	0

- 5) 「はう」を「ほう」に誤った語 1語

^{ほうむ}
葬る (正なし)

- 6) 「はふ」を「ほを」に誤った語 1語

^{ほを} ^{つけ}
投り附る (正なし)

- 7) 「ふ」を「う」に誤った語 (ウ音) 1語

^{ゆうぐれ}
夕暮 2 (正なし)

- 8) 「まう」を「もう」に誤った語 4語

語	誤	正	語	誤	正
^{もう} 取り設く	1	0	^{もう} 設け	1	0
^{もう} 儲け	2	0	^{もうけを} 設置く注	1	0

注 「お一を」の部重出

- 9) 「やう」を「よう」「よを」「やふ」に誤った語 1語

語	誤			正 やう
	よう	よを	やふ	
^{ようや} 漸く	4	1	1	4

- 10) 「よほ」を「やう」「よう」「よを」に誤った語 1語

語	誤			正 よほ
	やう	よう	よふ	
^{もやり} 催す	1	1	1	0

この項は、かなづかいによって整理した。イ音以下ズ音までの音声による分類とは違ってしまったので表としては不統一になった。郵便報知新聞の用例を分類して、1)から 10)までに分けたが、実際にはもっと種類があるはずである。この項に属するのは、主としてオ列の長音である。これに属する歴史的かなづかいは、語の書き方が多様であるため、誤りも 2 種類、3 種類にわたるものが見られる。しかし、これらを通じて、その誤りの傾向としては、現代かなづかに定められたオ列長音の書き方に準じるものが多いということができよう。

IV 比較調査

ところで今見てきた郵便報知新聞と前述の比較資料とをくらべてみよう。郵便報知で調査したのは、ふりがなの国語かなづかいで問題になる語すべてであったが、比較資料では訓よみの、誤ったかなづかいのものだけなので等質ではない。しかし、傾向を見るだけのためなのでこの範囲にとどめた。

() 内は、同一語内の正しい形

かなづかい 郵 小 安 交

1 イ 音

1) イをヒに誤ったもの	1	2 (2)	0	0
2) ヒをイに誤ったもの	53 (5)	9 (3)	8	15 (2)
3) キをイに誤ったもの	15	0	0	2 (1)

2 エ 音

1) エをエに誤ったもの	13 (1)	1	0	1
2) エをへに誤ったもの	8 (1)	2	0	4
3) エをエに誤ったもの	2	0	0	1
4) エをへに誤ったもの	15 (3)	0	2 (2)	2 (2)
5) へをエに誤ったもの	1	0	0	0
6) へをエに誤ったもの	5	0	0	0

かなづかい 郵 小 安 交

3 オ 音

1) オをヲに誤ったもの	93 (19)	0	2	23 (11)
2) ヲをオに誤ったもの	27 (9)	3 (2)	1	0
3) ヲをホに誤ったもの	2	0	0	0
4) ホをヲに誤ったもの	15 (2)	0	1	5
5) ホをウに誤ったもの	5 (2)	0	0	0
6) ホをフに誤ったもの	3	0	0	0
7) オホをヲヲに誤ったもの	4	0	0	3
8) オホをオオに誤ったもの	2	0	0	0
9) フをヲに誤ったもの	8	0	0	0
10) フをウに誤ったもの	1	0	0	0

かなづかい	郵	小	安	交
11) ウをヲに誤ったもの	1	0	0	0
4 ワ 音				
1) ワをハに誤ったもの	1 (1)	0	2	0
2) ハをワに誤ったもの	75 (18)	8 (2)	2	6 (1)
5 ジ 音				
1) ジをヂに誤ったもの	1	1	0	0
2) ヂをジに誤ったもの	11 (1)	1	0	0
6 ズ 音				
1) ズをヅを誤ったもの	12 (1)	3 (2)	0	0
2) ヅをズに誤ったもの	2 (1)	0	1	0
7 そ の 他				

かなづかい	郵	小	安	交
1) カウを誤ったもの	3	0	0	0
2) ガフを誤ったもの	1	0	0	0
3) ケフを誤ったもの	1	0	0	0
4) タウを誤ったもの	1	0	0	0
5) ハウを誤ったもの	1	0	0	0
6) ハフを誤ったもの	1	0	0	0
7) フをウに誤ったもの(ウ音)	1	0	0	0
8) マウを誤ったもの	4	0	0	3
9) ヤウを誤ったもの	1 (1)	0	0	0
10) ヨホを誤ったもの	1	0	0	0

上記の表を見ると、小新聞のかなづかいの誤りは、他のどの資料よりも少なく、つづいて安愚楽鍋が少ない。これらは、それぞれにおける訓よみかなづかいの語の1～2%前後である。これに対し郵便報知新聞は13%であり、交易問答は17%であって、ここにかかなりの開きがある。この開きを見る場合、かなづかい上、誤りをおかす語を多く含んでいるかどうかということ、および調査範囲の多少の違い、ならびに、本稿のⅡの最初に記した総語数の違いということは、一応考慮に入れる必要があると思うが、それにしても10%以上の開きがあるということは、質的な差異があるものとして考えてよいと思う。

それでは、誤りの多い郵便報知新聞と交易問答は誤りに類似の傾向があるだろうか。この二つは多少違っている。交易問答は、ヒをイに書き誤ることは郵便報知と同様であるが、エよりエが多く便われるという傾向はない。オをヲに誤るものはあるが、ヲをオに誤ったものはない。ハをワに誤るものは郵便報知ほど顕著ではない。ジ音、ズ音での混同もない。交易問答の場合、多く誤って書かれるの

は、イ音とオ音に関するものである。誤られた項目は、郵便報知に多く（38項目）、交易問答に少ない（12項目）。

郵便報知の書き手は、主として江戸生き残りの戯作者であろうが、交易問答の方は天下の学者加藤弘之である。加藤弘之は当時のインテリがそうであるように漢学に造詣の深い人である。江戸の終わりごろ、漢学者や戯作者、一般庶民がかなりほしいままのかなづかいをしたといわれるが、この調査はそれを裏書きするようである。加藤弘之は、明治35年官制公布後の国語調査委員会の初代委員長になった人である。小新聞や安愚楽鍋に、かなづかいの誤りの少ないのは、歴史的かなづかいに深く留意したためであろう。安愚楽鍋の作者仮名垣魯文にはそのことについて述べたものがある。また、小新聞のうちの東京絵入新聞の編集長は国学者前田夏繁である。誤りの少ないことは、当時規範意識の存在したことを物語るものと見られる。なお、明治10年ごろ出版された「大正漢語字彙」という小さな字書の附録に「音訓假名遣之部」というのがある。その序文中に、「文学日ニ盛ニ新聞紙月ニ行ハレ牧童モ文ヲ作り漁父モ亦投書ヲ綴ルニ至レリ世ハ斯克開ケタリト雖モ或ハ余ト同シク假字ノ用格ニ苦ム者アラム歟〜雷余ト同シク假字ノ用格ヲ知ラザル者ノ一時搜索ニ便スルノミ」と書かれているのは一つの裏付けとなる。

郵便報知のかなづかいは、比較資料のうち、小新聞・安愚楽鍋よりはるかに誤りが多く、もっとも誤りの多い交易問答に近い。誤られた項目は、交易問答よりはるかに多いから、誤りの傾向はバラエティーに富むと見ることができよう。戯作者の一部の人々や国学者には、歴史的かなづかに忠実であろうとする態度が見られる。誤りの中には、活字づくりの幼稚な時代であったから、書き手が植字方の制約をうけたといった技術的なことも考えられる。また、書き手の側に、ふりがなは読めればよいといった安易さがあって、それが誤りを多くしているかも知れないが、その辺の事情はまだよく分からない。

注1 日本文学大辞典 仮名遣 参照

注2 傍訓目的の仮名読にかな違ひ平一面（明10.3.7. 仮名読新聞）活字に（お）の仮名と（元）のかな大小共乏しく己を得ず「を」「ゑ」を用ひたる所も有ます（出典同上、「元」は「え」の誤植であろう。）

注3 仮名づかひは、彫工の勞をいとひて、「ちやう」も「てう」とし、「きやう」「きよふ」を「けう」「けふ」とするの類、余が號に呼るに似ざれど、是は裨官者流の平常と爲所になん。（西洋道中膝栗毛 四編総編本文読例、魯文作）

V 残 した 問 題

約束した紙数も超過しているので、以上で、かなづかいについての記述をとどめる。

送りがな（一部はすでに報告した）や、かな書きの語のかなづかいの考察、字音かなづかいの誤りの傾向との比較、ふりがなをふる場合と送りがなを送る場合、かな書きする場合にかなづかいについて、書き手の意識がどう働いたかなど、いくた調査すべき問題を残している。すでに資料を整えたものもあるので、機を見て報告していきたい。

注以外のおもな参考文献

- | | | |
|--------|----------|------|
| 山田孝雄氏 | 假名遣の歴史 | 昭4刊 |
| 木枝増一氏 | 假名遣研究史 | 昭8刊 |
| 江湖山恒明氏 | 新・仮名づかい論 | 昭35刊 |
| 国語学辞典 | かなづかい | |